



TITLE:

京大広報 No. 531

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 531. 京大広報 1999, 531: 606-631

ISSUE DATE:

1999-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196583>

RIGHT:



# 京大広報

No. 531

1999. 1



年末特別消防演習 関連記事本文611ページ

## 目次

新年を迎えて	総長 長尾 真	.....607
大学の動き		
新年名刺交換会		.....609
長尾総長のアメリカ合衆国及び		
ドイツ連邦共和国訪問		.....609
部局長の交替等		.....610
フンボルト大学との学術交流		.....610
人権週間に因む研修会の開催		.....610
外国人研究者との懇談会の開催		.....611
火災予防と年末特別消防演習		.....611
平成10年度の停年退職教官		.....612
平成10年度国立学校施設整備事業の決定		.....615
平成11年度予算案の概要		.....615
部局の動き		
教育学研究科大学院重点化記念シンポジウム		
及び記念式典・祝賀会		.....616
大学院農学研究科技術部技術職員		
研究集会の開催		.....617
大学院情報学研究科創設記念シンポジウム・		
記念式典・披露会		.....618

医療技術短期大学の動き		
平成10年度の停年退職教官		.....618
日誌		.....619
訃報		.....619
紹介		
防災研究所附属災害観測実験センター		
宇治川水理実験所新実験棟竣工		.....620
文化交流		
南ドイツの自然と環境保護，工業技術		
玉川雅章		.....621
保健コーナー		
「今の子どもたちの心」		.....622
洛書		
曾遊の地	中務哲郎	.....623
資料		
平成10年度京都大学市民講座講演要旨		.....624
平成10年度教育改善推進費		
（学長裁量経費）による研究課題		.....626
話題		
クラブ紹介 - 空手道部 -		.....631

## 新年を迎えて

総 長 長 尾 真

新年おめでとうございます。  
今年も京都大学がますます発展する年になりますよう、また京都大学の皆様それぞれにとって、去年よりも更に良い年となりますことをお祈り申し上げます。



さて、20世紀の終わりに近付き、皆様それぞれこの百年がどういう時代であったかに思いをめぐらし、新しい世紀の到来を待っておられることと存じます。大学としても、今世紀の大学、学問はどういうものであったかということを検討し、21世紀における大学はどうあるべきかを考え、その中で京都大学のあるべき姿、進むべき方向を明確にしてゆく必要があるでしょう。

19世紀以前が、神の存在という大きな枠組みの中での学問、人間活動であったのに対し、20世紀は、人間理性が完全に支配を確立した時代、そして人類はやることは何でもやりとげて来た時代ということができると思います。これはまた、学問的には分析(analysis)の時代といってもよいでしょう。すなわち、学問を精密化するために、物事を分析的にとらえてゆくということが徹底的に行われたわけであり、こうして学問は極度に発展するとともに、非常に細分化・専門化されて来ました。したがって専門の学問が適用できる領域については、目を見るようなことが実現して来ているわけであり、医学の最先端領域などはその典型的なものでありましょう。そして1つの学問領域は明確な学問的原理、方法論によって支えられており、それが1つの学問領域を規定しているという考え方が強く存在して来ました。

しかしながら、一方では学問が細分化・専門化して進歩するだけでは解決のできない多くの問題に直面するようになって来ました。医学の進歩によって、人間の死についての定義は医学だけでは全く決めることは出来ず、倫理、法律、あるいは民族文化など種々の面がかかわらざるをえない状況にあります。考古学においても、その発掘の技術、発掘されたものの鑑定の技術、総合的な解釈などは種々の学問を

駆使して総合的に行う必要が出て来ているわけであり、経済学においてもそうでしょう。これまで、経済活動をする人間を単一の単純なモデルで置き換えて経済現象の説明をしていたわけですが、それでは現代の経済現象を説明することはできません。

これからは、学問が対象とすべき領域が、考え方として正に逆転してゆく時代に入りつつあると考えられます。20世紀が分析の時代であったとするならば、21世紀は総合(integrate)の時代になっていくだろうということです。また、これまではある理論、学問的方法論で説明できる対象範囲が1つの学問領域を形成していたのに対し、これからは、ある問題領域が1つの学問領域を意味し、それを合理的に把握し、そこでの問題を解決してゆくために、いろいろと必要な学問的方法論を用いるという学問・研究の考え方に変わってゆかざるをえないのではないというわけであり、すなわち、

そういうコペルニクス的転回が行われつつあるのがこの20世紀末ではないかと思われ、すなわち、これまで築き上げられて来た学問体系の解体再統合の動きが歴史的必然として起こって来ていると見る事ができます。京都大学では、最近、エネルギー科学研究科、情報科学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科を次々と作り、本年4月には生命科学研究科を作る予定ですが、これらはいずれもそういった色彩を濃厚にもったものであります。

1つの学問原理で扱える領域を研究している場合には、他の学問領域がどうであるかを気にする必要はなく、いわば閉じた領域での学問ですんでいたわけであり、このようなコペルニクス的転回があるとすれば、そこでの学問研究は必然的に開かれたものであるはずであります。つまり1つの学問分野においてどのような研究方法論もありうるという、そういう性格をもったものとなってゆくでしょう。これは我々、従来の学問研究に従事して来た人間自身が、他の領域、他の領域の研究者に対して開かれた心を持ち、それらの人達といっしょに研究をするということを強く要請するものであると存じます。あるいはもっと言うならば、現在の世界から一步退いて根元的に考える能力、いわば現象学的還元の能

力を持つべきことを示唆していると思います。学問をしている我々が、謙虚にもう一度現実を、世界を見直し、自分の置かれている立場を反省的に検討し、全体把握をしなおすことが要請されていると言ってもよいでしょう。

教育においても同様のことが言えます。以前は18才人口のうちの5～15%が大学に進学するという時代でありました。そういった時代の大学における教育の考え方では、今日の50%近い人達が大学に進学する現状に対応することはできません。教育の対象となる若者の内容が大きく変わり、また卒業生を受け入れる社会も変わってしまっているのですから、教育に対する考え方も変わらざるをえないわけであります。

こういった大学の大衆化の中で、では京都大学はどのような人材を育成しようとしているのか、そのためにどのような教育を行う必要があるのか、あるいはまた、どのような入学試験をしてどのような学生を入学させようとするのかを、ここで改めてよく考える必要があるわけであります。

大学審議会は、1昨年10月末の文部大臣の諮問に対して、1年間の議論の末、昨年10月に最終答申を出しました。そこにはいろいろと多くの改善すべき事項が書かれております。我々はこれを、社会が大学をこのように見ているのだという真摯な態度で受けとめることが必要であります。しかし、さらに大切なことは、この答申でも要請していますように、我々は京都大学の使命は何なのか、どういう人材を育てあげようとしているか、学問研究はどうしようとしているのか、ということを社会に対して改めて明確に表明することが出来ねばならず、またそれを表明する勇気を持つ必要があるのであります。

上にも述べましたように、学問の考え方が変わりつつある時に、「学問のための学問」という古めかしい考え方がそのままよいのかどうか、そうであれば、なぜ「学問のための学問」なのか、もしそうでなければ、改めて「何のための学問なのか」ということを明らかにし、誰にでも分かり納得してもらえるように社会に対して表明し、社会を未来に向けてリードしてゆく必要があるわけであります。「学問の自由」ということについても同様の覚悟が必要でしょう。学問の自由とは何かということを深く考

えてゆけば、「自立ということなくして完全な自由はない」ということにも思い到るでしょう。これを大学人それぞれがどう受けとめるかということも1つの大きな課題であります。

我々は、ますます国際化してゆく21世紀の日本を支える中心となる人材を養成してゆく必要があります。複雑な国際関係をよく考え、我々の取るべき立場を明確に表現し、相手を納得させられる広い教養と深い専門的学識を持った人物といったことが考えられます。どういう人物像を描くかは、人により立場によって様々であります。しかし大学が1つの組織である以上、我々全体のコンセンサスとしての養成すべき人物像を明らかにし、それに向かって努力する必要があると思います。あらゆる可能性を秘めた社会に送り出すべき人物像など、描くことは不可能だという意見はもっともであります。しかしだからといって、養成すべき人物像を描き出す努力を放棄することは、教育という行為の持つ目的を放棄することであり、自己否定につながってゆくことをよく考えねばなりません。努力することによって目標は必ず描けるものと考えます。

大学は社会の一部であり、社会と結びついているのであります。大学改革とか、独立行政法人化とか、いろんなことが目まぐるしく議論され、大学は水に浮んだ木の葉か浮草のように翻弄されているように見えますが、もしそれが実態であるとすれば、学問・教育に従事している我々は大いに反省し、奮起する必要があると思います。不易流行という言葉があります。少なくとも京都大学の学問と教育、そしてそれに従事している我々は社会の変化や社会の要請に真摯に対応しつつ、なお不変である学問、教育、大学の使命というものを堅持し、しっかりと歩んでゆく覚悟と勇気を持つべきだと思います。

今年はそういった意味で、我々は現実の中に生きているのだ、しかしながら将来に向けて理想を掲げて進んでいるのだという大学人としての思いを新たに、教育・研究に励むべき年だと思います。こうして21世紀の幕開けとともに、この新しい世紀を支えるにふさわしい大学に発展してゆくという大きな希望と信念を持って進みたいと思います。皆様にとりまして、今年もより一層意義深い年となりますよう祈念して、新年のご挨拶といたします。



## 大学の動き

### 新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日(月)午前10時から京大会館において、長尾 真総長をはじめ、岡本道雄元総長、名誉教授、教職員約200名の出席を得て行われた。

はじめに長尾総長から新年の挨拶があり、次いで岡本元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前11時散会した。



### 長尾総長のアメリカ合衆国及びドイツ連邦共和国訪問

長尾 真総長は、11月15日から22日までアメリカ合衆国に出張した。

今回の出張では、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、同パークレイ校、スタンフォード大学(以上、本学との「学術交流に関する一般的覚書」交換校)、南カリフォルニア大学を訪問した。これらの大学では、学長、副学長、関係教官等と種々の意見交換を行う機会を持ったが、とりわけ本学と各大学間における遠隔教育や遠隔セミナーの実施の可能性について具体的かつ積極的な意見の交換が行われた。

上記に加えて、US-PECC<sup>注1)</sup>からの招へいを受け“Asia-Pacific Information Technology Summit (IT Summit)<sup>注2)</sup>”の専門部会で“Asia Pacific Cooperation for University Education”と題する講演を行った。

なお、今回の出張には、美濃導彦総合情報メディ

アセンター教授が同行した。

また、12月1日から7日までドイツ連邦共和国に出張した。

総長は、本学が「学術交流に関する一般的覚書」並びに「授業料等を不徴収とする大学間交流協定」を締結しているベルリン自由大学の創立50周年記念式典への招待を受け、式典及び各種記念事業に出席するとともに、フンボルト大学を訪問し、本学とフンボルト大学との「学術交流に関する一般的覚書」を交換し、フンボルト大学 Hans MEYER 学長をはじめ関係教官と懇談した。

なお、今回の出張には、鈴木健二郎国際交流委員会委員長及び西堀わか子総務部国際交流課長が同行した。

注1) PECC (Pacific Economic Cooperation Council : 太平洋経済協力会議)

PECC は、APEC が公式に認める APEC のオブザーバー

注2) カリフォルニア州サンタクララで、11月19、20の両日 US-PECC の主催で開催された会議

## 部局長の交替等

### 留学生センター長

宮崎 昭留学生センター長の任期満了に伴い、その後任として三好郁朗総合人間学部教授（国際文化学科言語文化論講座担当）が12月16日留学生センター長に任命された。任期は平成12年12月15日までである。



### 大学院農学研究科附属農場長

池橋 宏大学院農学研究科附属農場長の任期満了に伴い、その後任として矢澤 進大学院農学研究科教授（農学専攻園芸科学講座担当）が1月1日大学院農学研究科附属農場長に任命された。任期は平成12年12月31日までである。



## フンボルト大学との学術交流

本学は平成10年12月2日、ドイツ連邦共和国のフンボルト大学との「学術交流に関する一般的覚書」を、本学長尾 真総長とフンボルト大学 Hans MEYER 学長の署名により、交換した。

フンボルト大学との「覚書」交換にいたる経緯は、平成9年10月、本学の国際交流委員会委員がフンボルト大学を訪問した折に覚書交換の話題が出、以降国際交流委員会において検討を重ねるとともに、同大学と協議を続け、今回長尾総長の訪問で「覚書」が交換されたものである。

フンボルト大学は1810年創立の、人文・社会科学及び医学・自然科学の分野をもつ総合大学で、アルバート・アインシュタイン、マックス・プランクを初めとする29人のノーベル賞受賞者を輩出している。



現在、11学部を持ち、教職員数約3,500人、学生数約33,000人（内留学生は約10%）である。

本学の「覚書」交換校は、上記を含めて現在19カ国42大学2大学群である。

## 人権週間に因む研修会の開催

12月11日（金）午後3時から、附属図書館（3階）AVホールにおいて、人権週間に因む研修会が開催され、三好郁朗副学長及び渡邊 尚同和・人権問題委員会委員長等本学教職員約120名が聴講した。

冒頭、三好副学長から「人権の問題については、われわれ一人一人がしっかりと知識をもち、正しい人権意識を育てていくことが大切である。」と



挨拶があった。

本研修会は、学内外から講師を迎え、本学教職員を対象として同和・人権問題の啓蒙を図る目的で、毎年、春秋の2回開催しており、今回は、本学大学

院教育学研究科上杉孝實教授が、「ジェンダー，人権，教育」というテーマで講演を行った。

## 外国人研究者との懇談会の開催

本学において教育，研究に従事している外国人研究者と本学教官等との交流を推進するため、総長主催の「外国人研究者との懇談会」が恒例行事となっている。

本年度は、12月17日（木）午後6時より京大会館において開催され、外国人研究者及びその同伴者172名、並びに関係教官、各部局長、国際交流委員会委員、国際交流会館委員会委員及びその同伴者60名の合計232名が出席した。

懇談会は、ウエルカム・ドリンクを用意し、和やかな雰囲気のうちパーティーがはじまり、途中長尾



真総長の挨拶があり、盛会のうちに午後8時過ぎに閉会した。

## 火災予防と年末特別消防演習



本学教職員並びに学生諸君には、日頃から火災予防にご協力願っているが、火気の使用が多い時季にあたり、一人一人が防火についての認識と理解をなお一層深めるようお願いしたい。また、消防署によ

る本年度の立入検査において指示のあった喫煙管理の徹底、ボンベの転倒防止措置及びコンセントの取替等種々の事項や、各学部等で実施した消防用設備の点検等において改善を要するとされた事項については、早急に措置されるようお願いする。

本学には、学内の火災事故に備えて自衛消防団が置かれているが、本部地区自衛消防団による恒例の年末特別消防演習を12月25日（金）実施した。当日は、構内82カ所の屋外消火栓の位置及び水圧確認を行い、午後3時00分より本部構内において、自衛消防団の消防車による放水訓練を行った。

また宇治地区では12月15日（火）に実施した。

## 平成10年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、次の方々（教授44名，助教授5名，助手5名）が本年3月31日付で退職される予定である。

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
総 合 人 間 学 部	櫻 井 正一郎	昭和 11.1.6	国際文化学科 文明論講座	英國ルネッサンス期英詩の研究、および、英國 現代詩の研究
"	大 谷 晋 一	" 10.7.4	自然環境学科 物質環境論講座	炭水化物の有機化学的研究
大学院文学研究科	小 林 信 彦	" 10.10.16	文献文化学専攻 東洋古典学講座	初期サンスクリット古典文学の研究
"	喜 志 哲 雄	" 10.11.10	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	英米演劇の研究
"	清 水 御代明	" 10.8.16	行動文化学専攻 心理学講座	1) 概念獲得過程の研究 2) 意味連関の研究 3) 理論的思考の研究
"	成 田 孝 三	" 10.7.6	行動文化学専攻 地理学講座	先進国大都市の機能・構造・政策に関する研究
大学院教育学研究科	上 杉 孝 實	" 10.9.15	教育科学専攻 生涯教育学講座	社会教育における組織と学習内容の研究
"	齋 藤 久美子	" 10.5.16	臨床教育学専攻 心理臨床学講座	臨床実践を通じた理論的・実証的研究を心理力 動論に基づく投影法研究や臨床心理学的発達研 究などの形で行う
大学院経済学研究科	定 道 宏	" 10.10.20	経済システム分析専攻 統計・情報分析講座	経済統計データベースシステムの理論及び構築 に関する研究
大学院理学研究科	渡 辺 信 三	" 10.12.23	数学・数理解析専攻 基礎数理講座	偶然現象の数学モデルである確率過程の研究、 特に確率解析の方法による研究
"	今 里 哲 久	" 10.7.21	地球惑星科学専攻 水圏地球物理学講座	海洋における運動量、熱、物質の輸送過程に関 する研究
"	志 田 忠 正	" 10.4.9	化学専攻 物理化学講座	分子分光学的方法による分子の電子状態、構造、 反応性、相互作用に関する研究
"	鈴 木 仁 美	" 10.5.19	化学専攻 有機化学講座	芳香族化合物の反応とその機構、重いヘテロ元 素化合物の化学および大気汚染物質に関する研 究
"	河 野 昭 一	" 11.1.14	生物科学専攻 進化植物科学講座	ユリ目植物の分子系統学的研究；北半球温帯林 構成要素の比較生態学、集団生物学的研究
大学院医学研究科	泉 孝 英	" 11.1.20	内科系専攻 臨床器官病態学講座 呼吸器病態学分野	間質性肺疾患・閉塞性肺疾患の日本人における 病像の確立と病態生理、治療法に関する研究
"	本 庄 巖	" 10.9.1	外科系専攻 感覚運動系病態学講座 聴覚・言語病態学分野	中耳の換気生理に関する研究、人工内耳による 聴覚の研究、言語の認知と表出の脳機能画像に よる研究
"	三 好 功 峰	" 10.11.19	脳統御医科学系専攻 脳病態生理学講座 神経行動学分野	老年期痴呆性疾患の神経病理学的研究



部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
医学部附属病院	真 田 恵 子	昭和 11.3.23	内科系専攻 臨床生体統御医学講座 (病態栄養部)	生体液中の遊離アミノ酸に関する研究
大学院工学研究科	村 本 嘉 雄	" 10.12.5	土木工学専攻 水工学講座	河道の変動と流砂過程, 洪水流と水害および湖沼の環境水理に関する研究
"	小 林 昭 一	" 11.2.1	環境地球工学専攻 地圏工学講座	境界要素法に関する研究, 岩盤力学と初期地圧測定法の研究, 超音波応力測定法の研究
"	中 村 泰 人	" 10.11.8	環境地球工学専攻 都市環境安全工学講座	建築内外の放射伝熱に関する研究, 生気象学の工学的応用に関する研究, 都市の熱環境制御に関する研究
"	富 永 恵	" 10.7.31	建築学専攻 建築構造学講座	鉄筋コンクリート構造の脆性破壊機構の解明に関する基礎研究
"	加 藤 邦 男	" 10.8.21	生活空間学専攻 生活空間計画学講座	建築設計法の研究, 建築制作に関する建築論的研究, 生活環境構成の場所論的研究
"	木 村 逸 郎	" 10.8.7	原子核工学専攻 量子物質工学講座	中性子計測法の研究, 核分裂の物理的研究, 核燃料サイクルの中性子工学的研究, 半導体の中性子工学的研究
"	小 林 啓 祐	" 11.1.5	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	原子炉物理学に関する研究, 中性子拡散および輸送方程式の解法に関する研究
"	朝 木 善次郎	" 10.11.3	材料工学専攻 材料プロセス工学講座	金属製錬プロセスにおける反応工学の研究
"	内 本 喜一郎	" 10.12.3	材料化学専攻 有機材料化学講座	有機金属反応剤および遷移金属触媒を用いる高選択的有機合成反応に関する研究
"	瀬 尾 義 光	" 10.10.16	材料化学専攻 有機材料化学講座	クロマトグラフ用検出システム, 特に電気化学センサとマイコンを用いる高感度, 高選択的ガス電極検出器の開発
"	浅 田 忠 裕	" 10.11.23	高分子化学専攻 高分子合成講座	高分子の流動光学的研究, 液晶および高分子液晶の物性ならびに光工学, 高分子および液晶の非線形光学
"	砂 本 順 三	" 10.12.31	合成・生物化学専攻 生物化学講座	超分子集合体によるバイオシミュレーション
"	橋 本 健 治	" 10.8.2	化学工学専攻 化学工学基礎講座	不均一系の反応工学に関する研究
大学院農学研究科	川那辺 三 郎	" 10.9.9	森林科学専攻 森林生産学講座 森林生物学分野	森林の更新および林分動態に関する研究
"	福 間 順	" 10.5.19	地域環境科学専攻 地域環境開発工学講座 水資源利用工学分野	水資源利用工学に関する研究
"	村 嶋 由 直	" 10.12.8	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座 森林・林業政策学分野	林業の国際間比較に関する研究および木材産業の市場論的研究
大学院人間・環境学研究科	海 原 徹	" 11.3.26	人間・環境学専攻 人間形成論講座	近世私塾の教育, および19世紀日本における読み書き能力の研究
"	石 坂 恭 一	" 10.11.14	人間・環境学専攻 自然環境論講座	同位体比を用いた地質年代学的, 地球化学的研究

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
大学院エネルギー科学研究科	池 上 詢	昭和 10 .4 .27	エネルギー変換科学専攻 エネルギー変換システム学講座	内燃機関などの動力システムにおける燃料および大気汚染物質発生とその制御に関する研究
大学院情報学研究科	堂 下 修 司	" 10 .10 .17	知能情報学専攻 知能メディア講座	知能情報処理, 特に音声メディア理解に関する研究
"	藪 下 信	" 11 .2 .4	数理工学専攻 応用数学講座	多体系力学とくに太陽系微小天体の力学進化に関する研究
"	田 丸 啓 吉	" 11 .1 .27	通信情報システム専攻 集積システム工学講座	大規模集積回路のアーキテクチャと設計技術およびその計算機援用設計手法に関する研究
"	中 島 將 光	" 10 .10 .8	通信情報システム専攻 集積システム工学講座	マイクロ波固定素子と回路, 光通信素子とシステム, 大電力ミリ波伝送系, 電磁現象の基本概念に関する研究
化 学 研 究 所	松 井 正 和	" 10 .7 .13	界面物性研究部門	分析化学を基礎とする地球化学, 環境化学, 分子認識化学, 分離化学, 放射化学の研究
"	工 藤 清	" 10 .5 .2	有機材料化学研究部門	一酸化炭素および二酸化炭素を原料とする高压有機合成に関する研究
"	大 野 惇 吉	" 11 .2 .13	生体反応設計研究部門	生体内反応の物理有機化学的研究と, その合成化学への応用
再生医科学研究所	筏 義 人	" 10 .10 .15	生体組織工学研究部門	生体材料に関する研究
エネルギー理工学研究所	原 田 誠	" 10 .8 .29	エネルギー利用過程研究部門	内部構造, 界面構造をもつ液体の挙動, 構造形成とそれらの工学的応用に関する研究
防 災 研 究 所	田 中 寅 夫	" 10 .7 .17	附属地震予知研究センター	地殻変動とこれによる地震予知の研究
原 子 炉 実 験 所	小 野 正 義	" 10 .7 .13	中性子科学研究部門	原子炉熱中性子散乱実験装置の開発とその応用に関する研究
"	西 川 佐太郎	" 10 .9 .1	バックエンド工学研究部門	核反応で生成する放射性核種の分離分析の研究
"	前 田 豊	" 10 .10 .14	応用原子核科学研究部門	放射線を利用した物性研究。特に原子核と核外場との超微細相互作用に関する研究
霊 長 類 研 究 所	杉 山 幸 丸	" 10 .5 .16	社会生態研究部門 生態機構分野	霊長類の行動と生態, および人類の進化に関する研究
東南アジア研究センター	吉 田 彌太郎	" 10 .9 .3	人間環境研究部門	造血幹細胞異常症とくに骨髄異形成症候群に関する研究。医学的見地からみた東南アジアの環境論的研究
保健管理センター	森 下 玲 児	" 10 .5 .23	保健管理センター	ビタミンB <sub>12</sub> ・鉄代謝に関する研究。酢酸素と病態に関する研究。保健管理一般についての調査研究
留 学 生 セ ン タ ー	砂 村 賢	" 10 .9 .22	留学生センター	開発途上国の為替金融システムの構築。多国籍企業の経営分析

## 平成10年度国立学校施設整備事業の決定

平成10年度国立学校施設整備事業のうち、本学関係分は次表のとおりである。

示 達	事 業 名	構造・階	面 積	備 考
3次(補正)	(工)校 舎	SR 8 - 1	3,590m <sup>2</sup>	(凡例)
3次(補正)	(南部)総合研究実験棟	R 4 - 1	7,490m <sup>2</sup>	SR は鉄骨鉄筋コンクリート構造 R は鉄筋コンクリート構造 8 - 1 は地上 8 階, 地下 1 階
3次(補正)	(法・経他)総合研究棟(軸)	SR 8 - 2	8,900m <sup>2</sup>	
3次(補正)	(平野)生態学研究センター	R 3	2,030m <sup>2</sup>	

## 平成11年度予算案の概要

平成11年度予算編成は、いわゆる「15カ月予算」の考え方の下に、平成10年度第3次補正予算と一体的にとらえ、当面の景気回復に向け全力を尽くすとの観点に立って編成するものの、財政構造改革の基

本的考え方は維持し、限られた財源の中で経費の一層の合理化・効率化・重点化を図ることを基本的な考え方として編成された。

### 予 算 額 案

区 分	平成 1 0 年度	平成 1 1 年度	比較増 減 額	増 減 率
国 の 一 般 会 計	77兆6,692億円	81兆8,601億円	4兆1,909億円	5.4%
国 債 費	17兆2,628億円	19兆8,319億円	2兆5,691億円	14.9%
地方交付税交付金	15兆8,702億円	13兆5,230億円	2兆3,472億円	14.8%
一 般 歳 出	44兆5,362億円	46兆8,878億円	2兆3,516億円	5.3%
平成9年度決算不足補てん繰入		1兆6,174億円		
文 部 省 一 般 会 計	5兆7,909億円	5兆8,707億円	798億円	1.4%
(うち特会繰入)	1兆5,335億円	1兆5,537億円	202億円	1.3%)
国立学校特別会計	2兆7,009億円	2兆7,261億円	252億円	0.9%
人 件 費	1兆4,677億円	1兆4,810億円	133億円	0.9%
物 件 費	1兆2,332億円	1兆2,451億円	119億円	0.9%

### (参 考)

区 分	平成 9 年度	平成 1 0 年度	比較増 減 額	増 減 率
国立学校特別会計	2兆6,848億円	2兆7,009億円	161億円	0.6%
(うち物件費)	1兆2,343億円	1兆2,332億円	11億円	0.1%)

このような中で、平成11年度文部省所管予算は、人件費を抑制する一方で科学技術振興費や育英事業費などについては大幅な増額を図る等、徹底した合理化や見直しを行いつつ、各施策の優先度等を十分踏まえた上で、教育・学術・文化・スポーツの各般にわたる一層の充実・発展を図る予算が確保されたところである。

国立学校特別会計の予算は、教育・研究経費の効率化・重点化を図るとともに、既定経費のスクラップ・アンド・ビルドの徹底や、自己収入を最大限に

確保するなど、引き続き厳しい状況での予算編成となった。

なお、一般会計のうち大学関連の主なものとして  
科学研究費の拡充

1,179億円 1,314億円(135億円 11.5%増)

未来開拓学術研究推進事業の拡充

218億円 250億円(32億円 14.7%増)

ポストドクター等1万人支援計画の推進

6,130人 7,127人(997人増)

などが図られている。

## 平成11年度国立学校特別会計予算内示(本学関係)の概要

平成11年度国立学校特別会計予算内示の本学関係の主な事項の概要は、以下のとおりである。

事 項	備 考
研究科の新設 生命科学研究科(独立研究科)	2 専攻(統合生命科学, 高次生命科学) 修士課程 68人(平成11年4月より受け入れ) 博士課程 31人(平成13年4月より受け入れ)
専攻の整備(大学院講座の整備) 医学研究科	内科系専攻 博士課程 2人
入学定員の改訂 臨時増募の廃止	入学定員 80人(法学部 10人, 理学部 15人, 工学部 45人, 農学部 10人)
教育実習施設の新設 (工学)量子理工学研究実験センター	時限10年
教育実習施設の整備 (理学)地磁気世界資料解析センター	
京都大学キャンパス再配置推進調査経費	
特殊診療施設の新設 (病院)臓器移植医療部	
研究所の改組 数理解析研究所	13部門・2 外国人客員部門・1 施設 3(大)部門・1 施設
附属施設の新設 (霊長研)人類進化モデル研究センター	サル類保健飼育管理施設の廃止・転換

## 部局の動き

### 教育学研究科大学院重点化記念シンポジウム及び記念式典・祝賀会

大学院教育学研究科では、昨年4月の大学院重点化による改組を記念して、11月14日(土)都ホテルにおいて、公開シンポジウムを開催し、引き続き記念式典及び祝賀会を催した。

午後2時から開かれたシンポジウムでは「意味の生成と転換 - 子ども・学校・社会 - 」をテーマに、パネリストとして本研究科の3名の教官が担当した。まず矢野智司助教授が「子どもが生成し発達する場としての学校」という題で、伊藤良子助教授が「発話者としての私の生成」、岩井八郎助教授が「『弱





者』の転換とその意味」と題する問題提起を行った。それらに対して、林 寛子中日新聞論説委員が指定討論者として発言し、発題者との応答があった。引き続き山中康裕教授の司会で、学内外からの約100名の参加者による活発な討論が行われた。

その後、5時30分から開かれた記念式典では、竹内 洋大学院教育学研究科長の挨拶、長尾 真総長

の挨拶に続いて、高 為重文部省大臣官房審議官、加茂直樹京都教育大学長から祝辞が述べられた。

式典に引き続き行われた祝賀会では、中島義明大阪大学人間科学部長、鯨坂二夫名誉教授の祝辞のあと上杉孝實大学院教育学研究科教授の発声で乾杯、和やかに歓談し盛会のうちに終了した。

(大学院教育学研究科)

## 大学院農学研究科技術部技術職員研究集会の開催

大学院農学研究科・農学部では、11月25日、26日の2日間にわたり、附属牧場で合宿形式による技術部技術職員研究集会を実施した。

技術部は12名の小規模組織であるが、その職種は3系6分野にわたっており、所属・所在も京都市、向日市、丹波町、舞鶴市と広範囲に分散しているため、技術職員間の日常の交流が希薄になりがちである。また、農学という自然科学のひとつの分野にあっても、専門性の違いと職種の互換性の無さから研修は局部的になりがちで、これまで技術職員間の部分的な勉強会、自由研究は適宜行ってきたが、全体的な研修の実施には幾多の困難があった。

このたび、技術職員各自が技術部という組織の機能を改めて確認し、そのなかでそれぞれが果たす役割を認識するとともに、それが相乗効果的に職務の向上に結びつくことを期待して全体的研究集会を実施した。各技術職員は日常の多忙な職務を調整し、関係教官の理解と協力を得て、所在と専門分野の枠を越えて積極的な全員の出席をみた。

研究集会は課題研修、情報交換を中心に構成され、事務局より事務長と専門員をオブザーバーとして技術職員の自主運営性を前面に出して実施進行された。課題研修では『農学研究科における技術職員機構』及び『技術向上にかかる諸問題及び今後の活動』を課題に討論し、情報交換ではそれぞれの技術情報が報告された。また、宮崎 昭大学院農学研究科長（技術部長）による教育研究支援体制における技術職員的重要性を趣旨とする講演と、善林明治助教授による『日本人の牛肉消費と生産』と題する教養講義が行われた。会場となった牧場の特徴も研修の一



環に取り入れ、参加者が家畜飼育管理と大型トラクターの運転を実際に体験することによって、他分野の職種と技術に対する理解を深め、農学という分野の技術の広範さを認識した。懇親会を兼ねた夕食会においては、各技術職員より自由な話題が提供され、交流を深めた。

このように、日常交流に欠ける技術職員が一堂に会して寝食を共にし、共通の問題点を討論するとともに、それぞれの職務上の情報を交換することによって新たな自覚と知見が得られたことは、大きな成果であった。特に、それぞれが異なった専門性を有するが故に、その発想も多様で相互に学ぶべき点があり、今後これを弾みとして将来の職務の向上に資することを認識したことは意義があった。なお、会場となった牧場所属の5名の技術職員は、参加者であると同時に期間中の世話役も勤め、研究集会の円滑な進行と新たな人間関係を確立するうえに大きく貢献した。

参加した技術職員は、今回の研究集会を基に今後も健全な研究集会の回を重ね、その内容をより具体的な領域まで進展させるとともに、その成果を職務に還元させ、同時に技術職員間の親睦を深めることによって技術部を一層有機的に機能させることを「まとめ」として合意し、職務に復帰した。

(大学院農学研究科)

## 大学院情報学研究科創設記念シンポジウム・記念式典・披露会

12月11日（金）都ホテルにおいて、昨年春スタートを切った大学院情報学研究科の創設記念シンポジウム・記念式典・披露会が行われた。

午前のシンポジウムでは「情報学の展望」をテーマに、池田克夫大学院情報学研究科長の講演に始まり、ノーベル賞受賞者で茨城県科学技術振興財団理事長の江崎玲於奈博士による「21世紀における我が国の科学技術、研究体制のあるべき姿」と題する記念講演が行われ、国際色溢れるアカデミックな講演に約400名の聴衆が魅了された。

午後のシンポジウムでは、「21世紀を支える情報学を目指して」をテーマに石田 亨、乾 敏郎、茨木俊秀、片井 修、藤坂博一、松山隆司、森広芳照の各教授がそれぞれ最新の研究成果について講演を行った。

記念式典には、学内外の関係者約350名が参加し、池田研究科長の式辞に続き、長尾 真総長の挨拶、文部省高等教育局長の祝辞（代読 文部省高等教育局岩本 渉専門教育課長）、井村裕夫前総長及び土岐憲三大学院工学研究科長の祝辞、近畿通商産業局



長の祝辞（代読 通商産業省近畿通商産業局檜木俊秀産業企画部長）、京都市長の祝辞（代読 京都市増田優一副市長）がそれぞれ述べられ、奥田幹生元文部大臣をはじめ多数の祝電披露が行われた。

記念式典に引き続き行われた披露会では、池田研究科長の挨拶の後、有山正孝電気通信大学長、清野武、榎木義一、坂井利之、山口昌哉各名誉教授から祝辞が述べられ、沢田敏男元総長の発声による乾杯の後、学内外の関係者を交えて、和やかな歓談が行われた。

（大学院情報学研究科）

## 医療技術短期大学の動き

### 平成10年度の停年退職教官

京都大学医療技術短期大学部教員停年規程により、次の方々（教授2名）が本年3月31日付で退職される予定である。

氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
中 村 定 男	昭和 10.12.5	一般教育	プラズマ物理学の研究
高 橋 清 之	" 10.10.25	作業療法学科（病理学担当）	内分泌病理学に関する研究。人体病理組織検査学に関する研究

## 日誌

(1998年11月1日～11月30日)

- 11月2日 フランス共和国 トールーズ第1大学  
Bernard SAINT-GIRONS 学長他8名来学，  
総長及び関係教官と懇談
- " フランス共和国 ルイ・パスツール大学  
Jean-Yves MERINDOL 学長他3名来学，  
総長及び関係教官と懇談
- 9日 中華人民共和国 中国科学技術大学 朱  
清時 学長他5名来学，総長及び関係教  
官と懇談
- 10日 評議会
- " 平成10年度京都大学監督者（係長級）研

修（13日まで）

- 15日 総長，IT サミット（Asia-Pacific Informa-  
tion Technology Summit）出席及び高等  
教育・学術交流に関する調査のためアメ  
リカ合衆国を訪問（22日まで）
- 18日 国際交流委員会
- " 国際交流会館委員会
- 24日 評議会
- " 大学院審議会

## 訃報

## 井伊谷 鋼一 名誉教授



本学名誉教授井伊谷 鋼一先生は、11月26日逝去された。享年81。

先生は、昭和16年東京帝国大学工学部機械工学科を卒業，名古屋帝国大学理工学部講師，助教授を経て，同32年名古屋大学教授に就任，同39年京都大学工学部教授に就任され，化学工学科装置制御工学講座を担当された。昭和56年3月停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は昭和56年4月から同63年3月まで愛知工業大学教授を務められた。

先生は，集塵装置の性能と設計・操作に関する研究，乾式遠心分級機及びルーバ分級機に関する研究，

流体プロセス・粉粒体プロセスの動特性と制御に関する研究等，化学工学，粉体工学，プロセス制御工学の分野において優れた研究業績を残され，我が国の工業技術レベルの向上に多大の貢献をされた。

また，労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課専門家会議委員，通商産業省資源エネルギー庁公益事業部技術振興室石炭火力発電所高性能集塵技術実証試験検討委員会委員，京都府公害対策審議会委員を務められ，また，粉体工学会副会長，同会長，同名誉会長，日本エアロゾル学会初代会長，日本粉体工学技術協会専務理事，同会長，計測自動制御学会初代理事等の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院工学研究科）

## 田川 基三 名誉教授



本学名誉教授田川基三先生は、11月27日逝去された。享年88。

先生は，昭和9年京都帝国大学文学部文学科を卒業，同年同大学大学院に進まれたあと，京都帝国大学文学部副手，大阪商科大学予科講師・教授，第三高等学校教授を経て昭

和24年京都大学助教授（分校勤務），同38年教養部教授就任，同48年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，昭和48年4月から同55年3月まで京都産業大学教養部教授を務められた。

先生はドイツ文学，特に18世紀末より20世紀前半に至る時期の作家達や文学理論の研究を専門とされ，



中でもシュトルムの文学と思想に関する研究において数多くの優れた研究業績を残されたほか、専門的な語学教育に関する著書として『新ドイツ語の基盤』がある。

また、日本独文学会会員として活躍される一方、京都日独文化研究所評議員として、関西における日

独文化交流にも多大な貢献をされた。これらの一連の研究教育活動、学会活動により昭和57年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

## 紹介

### 防災研究所附属災害観測実験センター 宇治川水理実験所新実験棟竣工

宇治川水理実験所は、昭和26年4月に設立された防災研究所が結核研究所伏見分所用地を引継ぎ、翌年3月に誕生したが、同28年8月の実験所定員の認可を受けて正式な発足をした。その後、昭和41年の河川災害総合基礎実験施設の設置に伴い、敷地面積が61,000㎡に倍增されるなど、実験所の研究組織ならびに実験施設が順次整備され、国際的にも高い評価を得るまでに発展してきた。

この度、建設省による洛南道路の建設により実験所敷地が東西に分割されるため、その補償として主要実験施設を収容する四つの実験棟を再配置し、再配置に必要な周辺民地を所内の道路用地と等価交換することとなった。

補償工事は平成9年3月に開始され、同10年11月に完了したが、その概要は次のとおりである。  
第1から第4の実験棟(床面積合計18,570㎡)はいずれも鉄骨造平家建てで、屋内は無柱となっている。実験棟の外観は大きく緩やかな円弧状の屋根と縦長窓を配したシンプルな壁面で構成され、ポイントカラーとして各実験棟の窓部分のパネルが棟ごとに青、茶、緑、濃茶に色分けされている。

これらの実験棟には、人口降雨の発生装置を備えた雨水流出実験装置や流域模型のほか、大型長水路など各種の実験水路、土砂流出実験水路、波浪実験水槽、平面波浪実験水槽、水中振動台、琵琶湖や大阪湾水理模型などが収容されている。

屋外にも、風・気温・湿度・熱放射などを観測するための高さ55mの気象観測用鉄塔のほか、降水

の地中への浸透・蒸発散などを観測するためのライシメータ(浸漏計)などが設置されている。また、研究環境面への配慮として、実験所敷地の境界や構内道路周辺には各種の樹木が配置されている。

新実験棟の竣工を記念して、平成10年11月26日に三好郁朗副学長をはじめとして400人以上の関係者が集まり、記念式典ならびに祝賀会が催された。これを機会に、全国大学の共同利用研究施設として更なる飛躍を遂げることが、防災研究所に課せられた使命であると自覚している。



(防災研究所)



## 文化交流

## 南ドイツの自然と環境保護，工業技術

玉川 雅章

平成9年6月1日より同10年3月31日までの10カ月間文部省在外研究員としてドイツのエアランゲン大学流体力学研究所に滞在する機会を得ました。初めての長期滞在にも関わらず同研究所所長 DURST 教授のご厚意により客員研究員として快く受け入れていただきました。本滞在では，熱流体力学分野で同研究所が得意とするレーザ流速計測法とその応用に関する実験的研究を行いました。

さて，ここでは研究以外の大学の紹介や南ドイツ・バイエルン州での生活習慣などについて書くこととします。

滞在先であるエアランゲン大学は正式には Nurnberg-Erlangen Friedrich Alexander 大学という名称で，名前につけられている2つの市（人口50万人のニュルンベルグ市，10万人のエアランゲン市）の両方にまたがって学部が分かれている大学です。このうち理工学部キャンパスは20年ほど前に両市の中間にある森を切り開いてできた比較的新しく美しい建物であり，大学本部があるエアランゲン市中心街からは車で15分程度のところにあります。このキャンパスにある流体力学研究所は，他のいくつかの研究所と建物を共有していますが，多くの実験装置や設備を抱え，教授，助手や技官，大学院生等を加えて100人前後の大きな組織となっています。これらの恵まれた環境にあって，学生は教官から直接指導をうけるという教育体制となっていて，演習や研究など熱心に議論している姿があちこちで見られました。

次に生活習慣のほうに目を向けてみると，やはり一番目を奪われたのが近年世界的な問題となっている環境問題に対する実践的取り組みでした。町のあらゆる場所にはガラス（色識別あり），カン，プラスチック，紙（再生紙用）などの分類がかけられた巨大なリサイクル・ボックスともいえるべきものがおかれ，各家庭でも分類ゴミが整然と出されていました。また，買い物をして目に付くところでは，日本や他の欧米とは異なり飲料水関係は入れ物のほとんどが再生・回収が容易なガラスビンでした。特に日本で多く見られるペットボトルなどは，全体の割合から



ニュルンベルグ・カイザーブルグ城より旧市街を望む

みてごく一部でした。酒屋やスーパーでもびん回収を積極的に行っており，びん保証金のやりとりなどは昔の日本を思い出させるものでした。こういったリサイクルをはじめとする環境問題に対するドイツ人の取り組みには，“利益”，“効率”中心の日本の取り組み方と比較して感心させられるものでした。

環境保護とともにドイツのもう一つの顔である自動車王国の基礎となるアウトバーン（自動車専用高速道路）は，バイエルン州では世界に名だたる自動車メーカの中心地であることも手伝ってか，よく発達しています。アウトバーンと聞くと，速度無制限の印象が強いですが実際には騒音・事故や環境を考慮して半分ほどは速度規制区間になっています。私自身も運転はしていましたが，日本に比べ運転のマナーが格段によく運転に対するストレスが少ないのも特徴です。こうした状況なので，鉄道が発達しているにも関わらず200～500km離れた他大学などに研究会などで行く場合には圧倒的に車の利用が多いのもうなずけるところでした。また，先ごろ事故を起こしたドイツ鉄道の新幹線（ICE）を使っても状況によっては自動車のほうが早く着いてしまうといった感じでした。

バイエルンの夏はもっとも美しい季節で，7月頃になってやっと花が咲き乱れ，森の中の動物や鳥の活動が活発になります。この時期多くの方は，休日や仕事帰りにレストランやビアホールなどの屋外でゆっくりとこの自然を楽しみながらビールや食事をとることが習慣になっています。研究所の人や友人たちと語らいながら飲むビールは格別なものでした。

こうしたわずかのやすらぎの時間を取れることが、ドイツの研究生生活に潤いを与えるものでした。

最後に、自然の美しさと環境保護、工業技術の南ドイツでの滞在でしたが、東西統一後の不景気や政治・経済の変革、EU 統一などによって、“ドイツ

らしさ” が失われていくことが残念ですが、今後の発展を期待したいところでもあります。

（たまがわ まさあき

大学院エネルギー科学研究科講師）

## 保健コーナー

### 「今の子どもたちの心」

教師の刺殺事件や学級崩壊などに象徴されるように、子どもたちがキレたり、ムカつくという言葉に耳にすることが多くなった。子どもたち自身もよくわからないイライラ感にさいなまれているのだろう。筆者は小・中・高校の先生たちと話をする機会も多く、子どもたちの心について考えることがある。今回は、大学に入る以前の子どもたちの心の発達に関わる状況が、昔とどう変わっているのかについて私見を書いてみることにする。

少し古いデータだが、昭和55年と62年の一般少年と非行少年という4つのグループ（都内の中高生）の規範意識調査がある。それによると、遵法精神、徳性の点で、62年の一般少年の方が、55年の非行少年より低くなっている。きまりを守ろうとか、皆と仲良くという意識が弱くなっているのである。少し細かく見ると、自己解決性や共感援助性の低下や一般と非行少年の差の縮小も目立っている。一方、日本とアメリカの比較文化研究で、中学生のクラスでの人気者像を調べたところ、アメリカでは、強い、親切、勉強ができるなどの特徴が支持されたが、日本ではユーモアが断然高かったという結果がでた。正義感を支える精神的風土が弱いのである。これらを照らし合わせると、今の学校で問題になっているいじめや学級崩壊、指示待ち症候群などの現象を理解しやすくなるかもしれない。

その社会的背景は、価値観の多様化により、常識の基準がわかりにくくなったこともあるし、また、共同性意識が衰退したことにより、個々人が自己中心的になり、他者や地域、社会に貢献する動機づけが低下したこともあるだろう。そして、子どもの心

の発達の面から考えると、少子化と消費社会のなかで、子どもたちが、手応えを感じながら物との関係を深め、人間関係を築いていくという体験が少なくなっていることの影響が大きいのではないだろうか。結果として、自信とか耐性などが育ちにくくなっているようである。ある教育学者は「与えられるものの過剰、獲得するものの過少」と表現している。

そして、「普通」の子どもたちの置かれている現実には、「一流大学」への入学を最終目標とする受験競争に強い影響を受けている。受験競争というのは、親の欲求の代理充足の面から、努力して目標達成するという徳性の面から、将来の社会生活の安定という実利面からも肯定されるために、大人たちが熱心になるのだという人がいるが、確かにそうだろう。その上、その状況はエスカレートし、多くの親たちが我が子をその学力に応じて競争にエントリーさせており（高校進学率は95%を超えている）、親たち自身もそのような環境を生きてきたために、社会全体の価値観として子どもたちはそこから逃れるのが難しくなっている。塾は週3日から4日、5日となり、学習そのものも、興味を持って取り組むというより、得点を稼ぐための技術が優先されるようになってくる。

この状況から派生する問題は、一つは、人のことにかまわず自分の成績を上げることに専念するよう強制され、また、そのために人間関係や体験を制限されることである。また、もっと大変なことに、常により上の成績を目指すことを強いられる子ども達は、「今のあなたではだめだ」というメッセージを大人から受け続けることになり、自分を肯定し、

「こんな自分でもいいし、自分も人の役に立つのだ」という充足感を体験することが難しくなるのである。親たちも、勉強ができる子はいいい子、できない子はだめな子という見方だけで子どもに接してしまいがちになる。

小さい頃から、自分の子どもを無条件に認め、子

どもの自発性を尊重して、ちょっとした悪戯や失敗もにこにこしながら見守るぐらいの大人のゆとりある目が、生き生きとした子どもの心を育てるのではないだろうか。

(保健管理センター・学生懇話室 小林 哲郎)

## 洛書

### 曽遊の地

中務 哲郎

年のせいが多忙のせい、徒歩旅行などできなくなって久しいが、再訪の夢を今に引きずっている土地はあちこちにある。

国鉄土讃線大步危駅を降りて祖谷川沿いに東行し、見ノ越から剣山を南に越えれば那賀川流域に出る。祖谷川は葛橋の架かることでよく知られているが、那賀川には谷深い川の彼岸と此岸を結ぶ足漕ぎ式の吊舟というものがあると聞いた。籠渡しあるいは野猿と呼ばれるものの類である。朴野の辺りでこれを試した後、川口のバス・ターミナルを目ざして歩いていた時のことである。ステテコにクレープシャツ、腹巻姿の偉丈夫に呼びとめられた。山登りか、と訊かれて頷くと目を細めて、わしも若い頃は日に二十里は歩いた、三高で綾小路安麿というたら山登りでは誰にも負けなんだ、と話し始める。お公家さんみたいな名前ですねと言うと、そう、御所の中で生まれ育ち、元貴族院議員だが戦犯となってこの地に隠れ住み、もう二六年になる、と。それなら猪熊先生などと一緒でしたかと問うと、そう、と言う。法学部名誉教授の猪熊兼繁先生は幼時京都御苑内で遊びまわっておられた、ということを知り友人から聞いていたので、御名を持ち出してみたのだ。高ノ瀬峡から北川村へ出て、朴野まではバスで来た、と説明すると、それは惜しいことをした、とて、出合から十二社神社へ入った辺りに世界一の大理石魂があって、そのかけらでも指輪にすれば何千円とするピンクの美しいのがある。更にこの下、驚敷へ出ずに左へ折れた何とかという場所には蜂須賀家以来の燧石の

採石場があり、その透明なものは玉髓といって宝石扱いされる。今一つの場所はあるに言うても分からん、と聞きもせぬことを教えてくれる。勿論綾小路という名は変えているが、石のことでは全国にもちょっとは知られた男だ。元貴族院議員とはいえ今はこのとおりだ、と指さしてくれたのは、バス通りにかぶさる崖の窪みを盗んだような掘立小屋であった。

そのステテコ姿には確かに人品骨柄卑しからざる風格があった。立ち話の間、我が相棒は道路の向こうのガードレールに凭って佇み、二人の姿を写真に収めてくれなかったのは気の利かぬことであつた。旅の後で、学部違いの学生であるのに猪熊先生に手紙を差し上げ、このような人物がありうるかどうかをお尋ねしたのが一九七四年夏の終りのことである。頂いた御返書を携えて阿波路再訪をと思いながら幾夏が過ぎたことであろう。

(なかつかさ てつお 大学院文学研究科教授)



## 資料

## 平成10年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「しくみ」を共通テーマとして、10月31日及び11月14日の土曜日午後、2回にわたり法経第4教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであった。

金融のしくみ - 金融ビッグバンを考える -

大学院経済学研究科教授 古川 顯

教育と人生段階のしくみ

大学院教育学研究科助教授 岩井 八郎

ごみと化学物質 - ごみを減らすしくみ -

環境保全センタ - 助教授 酒井 伸一

皮膚の老化のしくみ

大学院医学研究科教授 宮地 良樹



なお、講演要旨を以下に掲載する。

## 金融のしくみ 金融ビッグバンを考える

大学院経済学研究科教授 古川 顯

バブル経済の崩壊以降、金融システム不安・不良債権問題が日本経済の重圧としてのしかかるなかで、「フリー・フェア・グローバル」を旗印にした日本版ビッグバンないし金融ビッグバンと呼ばれる金融上の「大改革」が実施されつつある。日本版ビッグバンは、2001年3月を期限として、様々な業務分野規制の緩和・撤廃や新しい金融商品・サービスの導入などによって、日本の金融システムの活性化を促す一連の措置を指している。こうした金融改革に踏み切らざるを得なかったのは、長短分離、信託分離、銀証分離などの厳格な業務分野規制のもとで日本の金融機関の国際競争力が低下し、各種金融機関の破綻に象徴されるように、制度疲労が顕在化するようになったからである。

ビッグバンとは、本来、宇宙の始まりで起きた大爆発を意味するが、果たして日本版ビッグバンが疲弊した金融システム再生への道を開く「号砲」となるのか、それとも「空砲」に終わってしまうのかは、残された2、3年にかかっている。

数年前若者の間で、「北京、ベルリン、ダブリン、リベリア…」という世界の地名を羅列した歌が流行した。この「アジアの純真」の歌詞さながらに、世

界の各地で生じた経済・金融危機が思いもよらぬ所へ飛び火し、伝染する状況が強まっている。この背景には、金融・資本市場の世界的な一体化が進むとともに、高度の情報通信技術や金融先端技術の発達によって、巨額の資金が瞬時に国境の壁、時間の壁を乗り越えるようになったからである。このように内外資金の交流が活発化しているもとでは、国内の金融制度をグローバル・スタンダード（世界標準）にサヤ寄せしなければ、国内の金融市場が空洞化する恐れがある。日本版ビッグバンは、こうした危機意識に根ざしているといえよう。

日本版ビッグバンの主眼は、金融機関相互の競争促進にあるが、これを金融サービスを利用する消費者の側から見ると、競争によって日本の金融システムが初めて消費者主権に向けて大転換を始めたことを意味している。少子・高齢化が急速に進む21世紀に向けて、豊かで創造的な社会を築いていくためには、金融を含めた日本経済の構造改革を大胆に押し進めることは喫緊の課題である。

（10月31日講演）



## 教育と人生段階のしくみ

大学院教育学研究科助教授 岩 井 八 郎

20世紀初めのアメリカ合衆国の学校では、生徒の留年率もドロップアウト率も高く、また授業は厳格で、書物が中心で、多様性が欠けていた。しかし当時の改革運動は、「効率性」をキーワードにアメリカの学校を大きく変化させた。「効率性」の導入は、「学校」の外から「学校」を見る視点の変化を意味している。その後、アメリカの学校は、大規模組織、細分化された学年段階とカリキュラム、厳密なテストなど、今日の私たちが当たり前とするような特徴を備えるようになった。自明視されている「学校のしくみ」がどのようにして出来上がったのかを考えてみると、「学校」の外にある「学校」のイメージの変化が大きな影響力を持っていることがわかる。

講義では、一つの例として、アメリカンフットボールを取り上げた。20世紀初めまで、アメリカの中等教育では、女子の成績は男子より勝っていた。当時の改革運動はこれを「男性問題」とみなした。学校はあまりにも「女性的」とであると批判した。男

女の別学や男女別の職業準備教育などが導入されたが、フォーマルなカリキュラムの改革よりも、男子の就学率を向上させたものは、スポーツであった。とくにアメリカンフットボールは、学校の体育とは全く関係のない、男子生徒の遊びにすぎなかったが、しだいに対校試合で（成績の良くない）男子生徒が学校のヒーローになることができるチャンスとなり、学校が女性的ではない証拠だとみなされるようになった。やがて運動競技が、学校の重要なプログラムとして支持を得るようになった。

「学校」の外にある「学校」のイメージの変化に対応して、学校内部の活動が評価され、部分的な改革が繰り返されてきた。その結果、今日の学校はますます複雑な組織となっている。カリキュラムは「美德の博物館」と呼ばれることさえある。講義の最後では、その弊害について指摘した。

（10月31日講演）

## ごみと化学物質 ごみを減らすしくみ

環境保全センター助教授 酒 井 伸 一

20世紀もあと残すところ数年、21世紀は目前となった今日、廃棄物を巡る今日の状況は、「ごみ破局」とでも称するべき状況と、「循環への光明」とが錯綜した複雑な状況を呈しつつある。具体的な「ごみ破局」には、香川県・豊島に代表される廃棄跡地問題の顕在化、埋立処分地が容易に建設できなくなっていること、そしてごみ焼却におけるダイオキシン問題等の状況を挙げることができる。「ごみ破局」がさまざまな局面で顕在化している一方、「循環への光明」もみえはじめていっている。1991年の廃棄物処理法改正でごみの発生抑制、リサイクルが謳われ、1995年には容器包装リサイクル法が成立したことは、まさに21世紀への光明といえる。いずれ、金製品に対して全産業がリサイクルに取り組むであろうし、これを環境管理システムが後押しする。そして、環境配慮型製品を好んで選択するグリーンコンシューマと呼ばれる消費者が現れはじめ

ている。

ごみを減らすしくみを考えるうえでの順位選択の基本的考え方は、①発生抑制（発生回避）、②リサイクル、③適正処理、である。廃棄物の中でもヒトや環境に被害を与えるポテンシャルの高い化学物質と関連する廃棄物への対処方策についても、その基本はほぼ同様である。そうした有害性の高い廃棄物に対して、より明確な対策の優先性を明示する目的で「3つのC」、つまり、「クリーン（Clean）、サイクル（Cycle）、コントロール（Control）」を対策の基本とするべきである。今後は、クリーン・サイクル・コントロール戦略を具体化するうえで欠かせない目標設定と、そこへの道具立てが重要である。その際、鍵となるポイントは生活者としての知恵と主権、これに深く関連する環境情報、そして循環と環境のための高度技術にあることを講座のなかでは強調した。

（11月14日講演）

## 皮膚の老化のしくみ

大学院医学研究科教授 宮 地 良 樹

加齢による皮膚老徴出現のメカニズムはまだ解明されておらず、したがって不老長寿の妙薬もない。しかし、皮膚の老化に限っていえば、これらの皮膚老徴のほとんどは紫外線による皮膚加齢現象であり、したがって防御可能である。

深く刻まれたしわやしみは、通常日光非露出部にはみられない。つまり、目に見える皮膚加齢現象は、普通の生理的な老化とは質的に異なるものである。これを光老化（photoaging）といって区別する。たとえば、生理的な老化でみられるしわは、細かいちりめん状のしわであり、光老化でみられるしわは、線状あるいは図形状の深いしわである。病理組織学的にも両者にはかなりの差異が指摘されている。しわは、真皮のコラーゲンやエラスチン、たるみは真皮のムコ多糖などに対する紫外線の組織障害の産物であり、しみは紫外線による色素細胞活性化とメラニン色素の増産によるもので、紫外線に対する過剰な自己防御反応と考えられる。したがって、いずれも紫外線防御により回避可能である。

紫外線が皮膚に到達しなければあらゆる光生物反

応は起こらない。オゾン層が破壊されつつある現在、皮膚に対する紫外線防御策は、光老化だけでなく皮膚癌の予防にも必須である。高齢化社会を迎えて、戦後の太陽崇拜世代ががん年齢に入っており、わが国でも皮膚癌が急増している。

最も肝要なことは、無用な紫外線をことさら浴びないこと、大量の紫外線に被曝することが予想されるときには紫外線防御を励行することである。物理的な紫外線防御としては被服、サングラス、帽子などが、物理化学的な紫外線防御としてはサンスクリンがある。また、抗酸化剤や組織傷害修復剤なども実用化されつつある。

皮膚の老化の約80%を説明しうる光老化のしくみを理解すれば、少なくとも目に見える皮膚老化をコントロールし、美しい皮膚を保つことが可能である。太陽の恵みを享受しながら、紫外線の害に泣くことのないように、紫外線に対する正しい認識を持つことが求められよう。

（11月14日講演）

## 平成10年度教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）については、各部局からのプロジェクト申請97件中47件が採択されました。

研究課題及び代表者等は、次のとおりです。

整理番号	研 究 課 題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
1	就職支援体制の構築	総合人間学部 教授 河野 敬雄	総人・人環
2	総合人間学部における外国語教育のCALL化	総合人間学部 助教授 東郷 雄二	総人
3	総合人間学部における過去4回にわたる自己点検・評価の分析と展望	総合人間学部 学部長 林 哲介	総人
4	ATM接続によるマルチメディア教材の授業利用ならびに開発・提供の促進	総合人間学部 教授 富田 博之	総人・人環
5	人文系専門教育のための多言語情報処理環境の開発と整備	文学研究科 教授 永井 和	文
6	文学研究科収蔵歴史系資料のデータベース化	文学研究科 教授 藤井 譲治	文

整理 番号	研 究 課 題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
7	高校の新教育課程と大学のカリキュラム開発	教育学研究科 教授 天野 正輝	教・高等教育
8	法曹養成教育のためのカリキュラム試案作成	法学研究科 研究科長 田中 成明	法
9	経済経営分析支援システムを用いた教育方法改善・高度化の研究	経済学研究科 研究科長 渡邊 尚	経・経研
10	地球科学における良質の顕微鏡画像を用いた多人数教育の改善に関する研究	理学研究科 教授 小畑 正明	理・総人
11	ヒューマン・サイエンス教育の体系化	理学研究科 教授 石田 英實	理・総人・霊長・ 文・農・高等教育
12	医学における形態学教育のための教育用ソフトウェアと電子教科書の開発	医学研究科 教授 塩田 浩平	医・病院・メデ ィア
13	バーチャルリアリティによる触診教育システムの開発	医学部附属病院 教授 高橋 隆	病院・再生研
14	医療薬学に関する教育システムの充実整備	薬学研究科 教授 佐治 英郎	薬
15	産学連携工学教育に関する調査研究	工学研究科 教授 大谷 隆一	工・エネ科・情 報
16	情報メディアを利用した専門科目授業の構成に関する研究	工学研究科 教授 藤本 孝	工・情報・メデ ィア
17	エネルギーの未来像と大学教育	エネルギー科学研究科 教授 小野 勝敏	エネ科
18	農学部留学生・外国人客員教官支援および学術情報交換のためのサイバースペース（電子情報空間）の開発	農学研究科 教授 祖田 修	農
19	多様な専門分野を志向する多人数学生集団の教育の充実的体系化	農学研究科 教授 林 力丸	農
20	大学院の地域研究教育のマルチメディア化に関する調査研究	アジア・アフリカ地域研究 研究科 研究科長 坪内 良博	アジア・アフリ カ
21	アフリカ地域研究に関する文字情報の蓄積と公開に関する研究	アジア・アフリカ地域研究 研究科 教授 田中 二郎	アジア・アフリ カ・東南研
22	環境汚染物質の溶液・固体状態における分子・超分子構造の画像 視覚化教育の実践	人間・環境学研究科 教授 田村 類	総人・人環
23	インターネットを用いた遠隔教育支援システムの研究開発	情報学研究科 教授 岩間 一雄	情報・メディア
24	京都大学における放射性同位元素等利用施設の緊急対策マニュアル 及びその教育プログラムの構築	放射性同位元素総合 センター センター長 寺島 泰	RI・理・医・薬・ 工・農・放生研
25	京大における学生の「課題探求能力の育成」を進めるための集会 の実施	高等教育教授システム開発 センター センター長 梶田 勲一	高等教育
26	公開実験授業成果の公開	高等教育教授システム開発 センター 教授 田中 毎実	高等教育
27	医学専門教育用マルチメディア教材のためのコンテンツ作成方法 の検討と実践	総合情報メディアセンター 教授 美濃 導彦	メディア・医
28	CALL 授業のためのマルチメディア教材の分析と開発研究	総合情報メディアセンター 教授 檀辻 正剛	メディア・総人・ 工・留学セ
29	WWW を利用したハイパーテキストによる医短学生用自習シス テムの開発	医療技術短期大学部 助教授 笹山 哲	医短
30	全学共通科目の学習に必要とする学生用図書および大学院生の研 究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館長 菊池 光造	全学部
31	留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館長 菊池 光造	全学部

整理 番号	研 究 課 題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
32	新入生向け少人数教育（少人数セミナー）の受講登録システムの改善	全学共通科目改善特別 委員会 委員長 古澤 巖	学生部・総人
33	総合人間学の可能性：自然系と文化系の融合をめざして	総合人間学部 教授 福井 勝義	総人・人環
34	ドームレス太陽望遠鏡諸特性の改善による国際共同観測の推進	理学研究科・天文台 教授 黒河 宏企	理
35	「人間・環境学」の社会的展開	人間・環境学研究科 教授 高橋 義人	人環・総人・文・生態学
36	環境保全教育の推進	環境保全センター センター長 内本喜一郎	環境保全委員会
37	地球環境問題に京都大学はどう取り組むか：環境フォーラムによる活動と提言のまとめ	生態学研究センター 教授 安部 琢哉	経・農・理・工・総人・環境・生態学
38	協力講座所属学生の現状とあるべき姿（エネルギー理工学研究所を中心としたケース・スタディ）	エネルギー理工学研究所 教授 尾形 幸生	エネ研・エネ科・原子炉・総人
39	マルチメディア制御システムの購入	附属図書館 館長 菊池 光造	全学部
40	京都大学施設データベースの作成と景観シミュレーションの再開発への応用研究	工学研究科 教授 宗本 順三	施設・工
41	本学の組織運営上の諸課題等についての調査研究	副学長 古澤 巖	大学の組織運営の 在り方検討委員会
42	中央と地方の行政システムの改革に関する調査研究	法学研究科・法政実務交流 センター 教授 松村 岐夫	法
43	京都大学現役学生の各種海外活動に関する実態調査	理学研究科 教授 瀬戸口烈司	理・人環・総人・東南 研・農・博物館・アジ ア・アフリカ・エネ科
44	活断層による京都大学構内の地震予測に関する調査研究	工学研究科 教授 渡邊 史夫	工・防災
45	森林動態の長期観測体制の確立 芦生演習林における天然林、二次林、人工林の動態調査	農学研究科附属演習林 教授 竹内 典之	農・演習林
46	KUINS II（ATM）を活用し生物科学大型情報の交換・解析・検索モデルシステム構築とその試行	遺伝子実験施設 施設長 清水 章	遺伝子・医・理・ウイルス
47	バイオハイブリット型人工膝の開発	再生医科学研究所 教授 井上 一知	再生研

## 平成10年度学術研究奨励金による研究課題

申請が173件（人文・社会系13件，理学・工学系64件，医学・生物系96件）あり，審査の結果，46件（人文・社会系4件，理学・工学系17件，医学・生物系25件）が採択されました。

研究課題及び研究者は，次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
近世大坂の知識人社会における情報交流の実態について	文 学 研 究 科 助 手 有坂 道子
弥生土器施文原体の復元的研究	文 学 研 究 科 助 手 伊藤 淳史
階層分化の背景 - 居住環境の管理という視点から -	文 学 研 究 科 助 手 富井 眞
信託保護法理の総合的研究	法 学 研 究 科 助教授 佐久間 毅



## 【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
堆積岩の帯磁率異方性の獲得過程の解明	総合人間学部 助 手 石川 尚人
偏光解析法による臨界点濡れ現象の研究	理 学 研 究 科 助 手 大政 義典
CP 対称性非保存過程 $K_L \rightarrow \pi^0 \bar{W}$ の測定実験における光子検出器の開発	理 学 研 究 科 助 手 野村 正
変成岩の上昇速度と岩石の粘性	理 学 研 究 科 助 手 WALLIS Simon
海底地滑り堆積物の記載とその運動像の復元	理 学 研 究 科 助 手 酒井 哲弥
地電位変動を用いた阿蘇火山の超長周期振動に伴う流体流動の解明	理 学 研 究 科 助 手 橋本 武志
混合気体の連続体極限における非 Navier - Stokes 的振舞についての気体論的研究	工 学 研 究 科 助教授 高田 滋
不連続性岩石材料の変形・強度特性の解明と等価連続体モデル構築に関する実験的研究	工 学 研 究 科 助 手 岸田 潔
順圧力勾配下における開水路乱流の逆変遷に関する基礎的研究	工 学 研 究 科 助 手 鬼束 幸樹
炭素カチオンブール法を用いる新しい炭素 - 炭素結合形成法	工 学 研 究 科 助 手 菅 誠治
界面近傍における特異現象解明のための AFM と FTIR を併用したアプローチ	工 学 研 究 科 助 手 神田 陽一
土壌中の不均質なパーコレーション現象に関する実験的研究	農 学 研 究 科 助 手 小杉賢一朗
新規な高温型プロトン導電体の創製とその導電機構に関する基礎的研究	人間・環境学研究科 助 手 雨澤 浩史
大規模災害レスキューロボットとしての汎用援助ロボットの開発	情 報 学 研 究 科 助教授 大須賀公一
境界層レーダー・気象レーダー観測に基く冬期雷雲内対流構造の研究	超高層電波研究センタ・ 助 手 橋口 浩之
キラルなホモオキサリックス [ 3 ] アレンを基本骨格とした新規ホスト化合物による不斉認識機能の研究	化 学 研 究 所 助 手 椿 一典
酵素的有機塩素分解の構造生物学的機能解析	化 学 研 究 所 助 手 藤井 知美

## 【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
形質転換藻類細胞を用いた生細胞における分子およびオルガネラ観察法の開発	総合人間学部 助 手 幡野 恭子
高等真核生物の遺伝情報維持に関わる DNA 修復酵素の同定と機能解析	理 学 研 究 科 助 手 張 秋梅
樹状突起のパターン形成のメカニズム	理 学 研 究 科 助 手 上村 匡
ニューロンの細胞極性決定における Wnt ファミリー遺伝子の機能解析	理 学 研 究 科 助 手 見学美根子
EF - 1 $\alpha$ など保存性の高い遺伝子のエクソン - イントロン構造を指標にした後口動物の分子系統学	理 学 研 究 科 助 手 和田 洋
ノックアウトマウスを用いたがん細胞転移機構の解明	医 学 研 究 科 助 手 高橋 智聡
過分極誘発陽イオンチャネルの機能と構造に関する研究	医 学 研 究 科 助 手 石井 孝広
血管内皮から血液細胞への運命決定の分子機構に関する研究	医 学 研 究 科 助 手 小川峰太郎
細胞局所のアクチン形成を制御する細胞内情報伝達系, Rho - mDia 系の分子機構の解析	医 学 研 究 科 助 手 渡邊 直樹
細胞間接着装置に局在する PDZ ドメインを持つ分子 ZO - 1 , ZO - 2 , ZO - 3 の解析	医 学 研 究 科 助 手 伊藤 雅彦
タイトジャンクションを構成する新規膜タンパク質クローディングファミリーの機能解析	医 学 研 究 科 助 手 古瀬 幹夫
$\beta$ カテニン欠損細胞樹立の試み	医 学 研 究 科 講 師 永淵 昭良

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
カチオン性薬物の消化管吸収機構の解明	医学部附属病院 助 手 桂 敏也
cornified cell envelope と角質層脂質との相互作用に関する生物物理学的研究	薬 学 研 究 科 助教授 山下 富義
中枢性疲労の発生における脳内活性型 TGF - $\beta$ の役割と作用機構の解析	農 学 研 究 科 助 手 井上 和生
生体触媒のもつ立体選択性の改変	農 学 研 究 科 助 手 片岡 道彦
低酸素による遺伝子発現調節機構を利用したアンチセンスベクターの特異的腫瘍細胞死誘発作用における有効性の証明	農 学 研 究 科 助 手 増田 誠司
青色光受容体によるサーカディアン（概日）リズム制御機構の解明	放射線生物研究センター 助 手 加藤 友久
ペプチドモデルによるイオンチャネルの立体構造形成メカニズムの解明	化 学 研 究 所 助教授 二木 史朗
小脳の長期抑圧における MAP キナーゼの作用とその運動学習における役割の研究	再生医科学研究所 助 手 河崎 洋志
プリオン病原体の経口侵入ルートに関する研究	食糧科学研究所 助教授 福岡 伸一
種子プロテインボディー形成における貯蔵タンパク質遺伝子発現プログラムの必然性：シャペロン説	食糧科学研究所 助 手 丸山 伸之
テロメア維持の分子機構の解析	ウイルス研究所 助教授 真貝 洋一
サル上頭頂葉皮質における身体イメージの再現様式の解明	霊長類研究所 助 手 中村 克樹
低栄養ストレスによる視床下部 LHRH pulse generator 活動の制御メカニズム	霊長類研究所 助 手 大蔵 聡

## 平成10年度学術出版助成金による研究課題

申請が2件（人文・社会系1件，理学・工学系1件）あり，審査の結果，いずれも採択されました。  
研究課題及び研究者は，次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
大正デモクラシー期の法と社会	法 学 研 究 科 助教授 伊藤 孝夫

### 【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
Theory of conditional random field and its application to wind engineering (条件付確率場の理論と風工学への応用)	工 学 研 究 科 助 手 盛川 仁

## 話題

## クラブ紹介

## 空手道部

空手道部は、昭和12年に創部され、平成9年には創部60周年となった。

この長い歴史の中で、代々受け継がれてきたものが、「考える空手」の実践である。無駄で肉体を損なうおそれのある「しごき」と呼ばれるような練習を排除し、「技の理論」を各自が考えて練習し、部員同士がお互いに高め合いながら、技の研究をし、良いものだけを取り入れることを伝統としている。

また、先輩諸氏によって構成される指導部 - 幹部部員 - 部員というような縦の指導体制が合理的な練習基盤となっている。

このように、「考える空手」を実践してきた結果、対外試合においても多くの実績を残してきた。国立七大学総合体育大会では、過去には5連覇を達成したこともあり、平成10年度も優勝し、2連覇中である。

全国国公立大学空手道選手権大会においても幾度となく優勝経験を持ち、国公立大学では最強の部であると自負している。



他に、全関西や西日本の学生空手道選手権大会などという大きな大会においても優勝の経験を持っており、残るは全日本学生空手道選手権大会のみである。この大会を制覇し、京都大学空手道部が全国で最強の大学であることを証明する日も近い。

現在、部員は19名で、その半数以上が有段者であり、総合体育館西側地下1階の武道場を主練習場として、全国制覇に向け、部員全員が一丸となって挑戦を続けている。